

報告⑧

(特集)各地の高校魅力化プロジェクトを紹介 奥尻高等学校の町立移管と高校魅力化(下)

地域学校協働への役場の期待

——産業の変化と教育の方法・目的の共有化—— (奥尻町役場地域政策課)

青山学院大学 樋田 大二郎

奥尻町役場地域政策課の幅口一路主幹と羽立仁主幹にお話をうかがった。

奥尻島の水産業では近年捕れる魚種や漁獲量が変わってきている。観光業では大きな温泉ホテルの撤退とフェリー航路の縮小があり観光を取り巻く環境が変わりつつある。このような変化の中で、お二人の主幹は水産業や観光業の転換の可能性を考えている。水産業では新しく捕れ始めた魚種のブランド化や養殖漁業の開始、観光業では着地型観光や個人客の呼び込みの開始である。

こうした可能性の中で必要となる地域の人材というのは、「いろいろな人を結びつけられる人」が必要になってくるという。町内で水産業と農業をうまくつないでいく、それらと観光業の人とをうまくつないでいく。さらに島外とのつながりをうまくマッチングできる人である。

地域と高校の協働については、必要な能力を育てるという意味や現時点での提案の有効性という点で、お二人は肯定的である。

僕が高校生のときに、あんなに町のことを考えて何かをつくるとかつていうことができなかった。それが今の高校生ができるっていうのは、すごい頼もしいと思っております。そして、高校生の世代にしか見えない世界があると思います。色使いがあると思います。そういった意味からも、発信してもらおうとありがたいです。(インタビュより)

例えば仕事してても、自分の意見をぶつける力っていうのは、

これから必要になってくるだろうし。例えば、今まで意見できなかった人とかも、そういうようなもので変わっていくっていうことを考えると、成長なのかなっていうふうに。(インタビューより)

興味深いことの一つに社会貢献の変化がある。都市の下町や地方郡部などの伝統的な共同体が生き続けている地域では若者の社会参加は共同体の日常の中に組み込まれていて、若者は無意識のうちに(自然に)社会貢献する。これに対して、高校魅力化で伝統的な共同体が生き続けている地域において、高校生は無意識の貢献に加えて、問題意識と当事者意識を持つて地域社会に働きかける。自発性、主体性、問題意識などの言葉で形容される社会参加である。インタビューでは、このことと関連して、奥尻には高校生の地域社会貢献の場合は町立への移管以前からあった。しかし、高校生は以前は頼まれて貢献していたのが、町立移管後は、自分たちから言うようになったということであった。

今は、自分たちで発案してやるんですよね。……自分が社会教育にいたときは、高齢者が「若い人と交流したい」とか、「子どもも孫もみんな遠くにいるんだけど、そういう孫の世代の高校生とかとちよつと話したい」とか、そういう要望があったりとかして、そこを結びつける役割というのを社会教育でやっていたんですよね。

……今は高校生は自分たちでやることを、自分たちで考えてやっている感じなんですよね。だから、今と以前とはちよつとタイプが違うような気がします。(インタビューより)

また、お二人は高校生の取り組みについて高い完成度や成功することに拘らない。失敗することにも意義があると考えている。

「自分たちでやりたいって思うことを、やらせてあげたい」っていう気持ちはあるんですよね。

例えば、それが失敗であっても、「じゃ、次どうやったらうまくいくのか」っていうことを考える機会になるだろうし。そういう経験っていうのは積ませてあげたいっていうのは、ほんとに思いますね。(インタビューより)

失敗から何を学びとるかっていうのが、成長の過程で必要なくて。「どっぴうような計画と、どっぴうような思いがあつてこれを作つたんだ」っていうものと、それでうまくいかなかつたときに考察する時間つて絶対必要だと思つるので。(インタビューより)

さらに、高校生には完璧さを求めないで良いと語る。それは町の立場からだけでなく、高校教育の意義の立場からもそう考えているように感じられた。こうした姿勢は、生徒の地域課題解決の到達度の高さよりも、地域課題解決型学習の学習の深さへの関心を示しており、「(奥尻高校で)問題解決力と適応力を高めてもらいたい」という表現に表れている。お二人の語りは、地域課題解決型学習が成果や貢献度にとらわれてはならないことの警鐘と言える。

自分たちの足とか目で稼いだ情報で、それを疑問に思つたこと

を素直に発表できるっていうことの方がいいかなっていうようなことが、今の自分の考えとしてあります。(インタビュより)

問題解決力っていうのは、多分、今から積み重ねてやっていくことで、将来例えば、自分は就職したときとかに役に立ってる知識だと思えます。……「今やってることが、じゃあ直接地域にすぐ反映できるか」とか、そういう部分はやっぱり自分たちもあんまり考えてはないですよ。ただ、この奥尻の高校生として、やっぱりそういう問題解決力と……自分はその環境に合わせられる適応力っていうのか、っていうのは、その問題解決力と適応力をこの高校で高めてもらいたい……。 (インタビュより)

最後にお二人のインタビュウから感じられた、小さくてつながりが豊かな町(コミュニティ)で、高校が町立へ移管されることの効果を三つ述べたい。

第一は、内発的な擬似コンソーシアムについてである。お二人は、一方で奥尻町の地域課題を見据えた上で今後の地域人材の資質を考え、他方で同時に高校教育の意義の視点から奥尻高校生の教育を考えていた。奥尻高校は「地域との協働による高等学校教育改革推進事業(文科省)」が提案するようなコンソーシアムは構築していない。しかし、奥尻高校の取り組みに協力・参加する過程で、お二人は地域の視点と高校教育の視点を併せ持つて、奥尻高校の地域課題解決型学習に深く思いをはせていることが印象的である。小さくてつながりが豊かな町(コミュニティ)があり、その町の高校の町立移管を行ったときには公的なコンソーシアム組織を構築していなくても、インフォーマルな



ながりの中で地域と高校が協働できている。

第二に、行政内の担当部署ということでは、教育や水産、農業についてはお二人とは別に担当者がいる。しかし、お二人は縦割りの担当者意識からではなく、教育と産業の連携に深く関心を持っておられた。小さな役場だから全体のことを考えることができるという側面があるのだろうか、それだけでなく高校生を町全体の中で育てるといふ視点に立って、さらには町の活性化過程の側面の一つとして高校教育の魅力化を考えていた。他の町での訪問調査の折にも同じことを感じるのだが、高校生の地域課題解決型学習を支援する者は高校と町の関係に對しての当事者意識が同時に高まっている。

第三に、お二人が強調したことは奥尻高校との間で、教育についての考えをもっと共有化したいという希望であった。文科省から降りてくるのとは違う、現場からの地域高校協働の展開があるとしたら、奥尻町の事例にその萌芽が読み取れる。繰り返しになるが、つながりが豊かな町の町立移管であり、現場からの内発的な協働だからこそもっと知りたいという願望や、もっと共有化したいという願望が容易に芽生えたように思えた。

奥尻町では、地域人材を育成する教育動向と高校教育を魅力化する教育動向の交点で、形式面での制度とは別の協働が芽生えている。そしてその協働では知りたいとか共有化したいとかの願望が育っている。

町役場から見た地域人材に必要な資質、そしてその資質を主体的に育てるための配慮あるいは資質を育てるための町役場と高校の教育的配慮についての意見の共有の重要さなど、とても貴重なことを教えていただきました。お忙しい中、お時間をいただき、ありがとうございます。

ました。

1 水産業と観光業が変わりつつあること

— それでは最初に、「地域活性化の状況について、今この奥尻島がどうなっているか」、「どんな取り組みをなさっているか」教えていただきたいと思います。

幅口一路主幹：地域活性化という言葉はちょっと漠然として、お答えづらいなとは思ってはいるんですが。実際のところ、私もが携わっているとすれば、産業の増加に入っていくのがメインになっていきます。役場の知事部局としては、そういうようなかたちになっていくと思っています。

— そのなかで、新しい地域資源をどう活用していくのか、っていう課題への取り組みを始める状況だと思っています。

今まで水産が基幹産業でした。ところが、今までやってきた魚種が捕れなくなるという転換点を迎えています。「そうしたときにどうするんだ」っていうところに、今直面してきているのかなっていうのが、今の町の状況だと思います。

— 当面のというか、直近の課題は、「水産業自体が今変わりつつある」というところですか。

幅口主幹：今まで捕れていた魚が捕れなくなってきたっていう状況がありますので。今までの形態の水産業では、もう成り立っていない

なくなる。これがまた、劇的に魚の捕れる量とか変わってくれば、またそこはそこで昔の方に戻っていくとは思っていません。

羽立仁主幹：観光も、私は観光を担当してるんですけども、例えば、ホテルの撤退とか、あとフェリー航路の縮小だったりとか。観光を取り巻く環境は、だんだんきびしい方向に行ってると思うんですけど。ただ、マイナス要素ばかりじゃなくて、例えば個人旅行者が増えるような現状で。例えば、飲食店に行ったりとか。そこで例えば、奥尻の飲食店の経営者がお話する場があったりとか。そこで例えば、奥尻の知識を少し知って、楽しい旅になったりとか、島民と観光客が触れる機会っていうのも、増えているのは事実だと思います。

そのような中で、自分が担当している島の景色とか料理とかも魅力的なものだと思うんですけども。やっぱり、ここに住んでる人のやさしさっていうのが、そういうのが魅力の一つだと思っています。

団体旅行で行くところが決まっただけで歩いてただ歩いて歩くだけだと、そういう部分に触れることもなかったりしました。ほんとの奥尻のよさっていうのは、こういうきびしい状況のなかだけれど、これまでよりもよけい伝えられる機会が増えたんじゃないかなっていうのは、観光を担当しての正直な感想です。

人と人が触れ合って、奥尻に来たやさしさ、そういうのを体感していつてもらえたらいいなっていうのは思うんですけど。結局、来ていただいたお客さんを大事にすることが、次の観光につながるっていうふうに考えていて。人数は減ってしまうんですけども、そういう部分は強調できる部分なのかなと思います。

——そうしますと、観光は今変わろうとしているということでしょうか。

羽立主幹：そうですね、環境が変わっています。今までだったら、ずっと同じような環境で続いてきたのですけども。ここ数年、ほんとに大きいホテルが撤退したとか、フェリー航路の縮小だったり。あと、これからも、例えば宿の経営者が高齢化するとか、そういう問題で、今後維持していくのが難しい状況になってくると思うんですけど。

だから、そういった面で、例えば宿の経営者も、「食事を作るのがすごい労力だ」というふうになれば、泊食分離だったりとか。あとは、そういうので例えば、宿に泊まって終わりだったら、その人としか触れ合うことができないんですけども。いろんなところに出ることで、いろんな人と交流したりします。あとは、当然いろんなところに行くことによって、お金もそこに落ちるっていうかたちになると思いますので、そういうようなかたちを、今模索している状況です。自分のリーダーの考え方は、例えば、これまでは「おいしい料理や景色」をずっと言ってきたんですけども、「あれ、おいしかったね」とか、そういう思いは当然残ると思うんですけど、リーダーにつながるかっていったら、ちよつと薄いかなと思うんですけど。

でも、例えば、いろんな人にお世話になって、「また、あの人に会いたい」という気持ちや、リーダーにつながるのかなと思っています。だから、そういう関係づくりっていうのか、たまたま自分が例えば、よその町でたまたま会って意気投合した人が、「会いたい」と奥尻に来てくれることとか、よくあるんですけど。

だから奥尻で、例えばいろいろな一緒にやって、数年後に、「また、あ



の人に会いたいな」って思ってもらえるのが、一番リーダーとしてつながるのかなって思っています。

奥尻って、観光も極端な話すると、あまり利益重視じゃないんですよね。何でも、安く安くっていうのがあって。すごくお客さんをもてなすことに力を入れるんですけど、「じゃそこから生み出す利益がどれぐらいあるか」っていうと、多くはないのです。でも、奥高野の経営者っていうのはそれで良くて、やってるんです。

ただ、私たちとしては、例えば稼げるときには、今までより少し稼いでほしいって考えます。結局、稼げないと、後継者にもつながらないし。そういうところが、例えば、自分の代で終わるんだったらそれでいいのかもしれないんですけど。

やっぱり地域として、それだと活力がなくなってしまうんです。少し、やっぱり利益を上げるようなかたちで、後継者とかにも「こういうふうにやったら支持される」とか、そういうふうなものいいんじゃないかなって思うんですよね。

あと、実感では、飲食店に行っても、宿に泊まっても、たくさんのものは出るんですけど、「じゃあそこまで高いか」っていうと、そこまで高くないっていうのをすごい感じますね。

——来る前に、インターネットで奥高野のことを調べていると、宿に関する記述では、「女将さんが親しく話してくれた」とか、「やさしかった」とか、そういうことがたくさん書いてありました。それはある程度、そう書いて貰ってうれしいと思われていますか。

羽立主幹…島の人は多分、外から来た人に対しても、そもそもあまり



警戒心がなくて、ちょっとフレンドリーっていうのかな、そういうような感じだと思います。

——昨日、神威脇温泉に行ったら、施設のお父さんと、もうずっとずっと話し込んで、いろんな話をしてくれました。

今夜、お店にご飯を食べに行けば、どこかの段階でお店の人が、横の人と私をつないでくれたりするでしょうか？

羽立主幹…そうですね。地元の人も、例えばお店の中にいれば、一緒に飲むこともありますし。ただ、例えば自分たちからしてみると、お客さんが、一緒にはまって楽しみたいんだったら、大歓迎なんですけど。一人でいたいのか、一緒に交流したいのかっていうのは、わからないんですよね。

だから、来てくれるぶんには、すごい歓迎なんですけども。そこを、例えば島民から積極的にに行けるかっていったら、そこもまた難しいところなんですよね。

2 高校生に将来どのような

地域人材になってほしいか

——つぎに、先ほど幅口様のお話で、水産業は、捕れる魚が変わってきた、あるいは、捕れる量が変わってきた、ということでした。今後、どういう方向に行くだろうという予想を立てていますでしょうか？

幅口主幹…そこは、専門である水産農林の方に判断はゆだねるしかないかなと思うんですけども。

今、新たに捕れてる魚種ですかね。「ブリが捕れている」とかっていう話が出てきていますので。そっち側の方にうまくブランド化をしていくとか、そういうようなものが、新しい今捕れるところに対応していくのが一つですね。あとは、昔から言われていることなんですけど、養殖にも、もう手を出さざるを得ないんじゃないかなってというような気持ちは持っています。

—そのような部分は、外の資本に頼ることになるんでしょうか。それとも、島の人たちで工夫することになるんでしょうか。

幅口主幹…基本的には、ブランド化とかっていう技術の部分では、やっぱり外とつながっていかないととは思ったりします。しかし全部中で完結するというのは、難しいかなと思うんです。

—難しいですか。

幅口主幹…養殖とかいろんなものでも、資本を呼び込むとか、島外から持ってこなきゃならないでしょうし。あと、許可を持っているのも島外だったりしますので。「何かをやるう」っていったときには、やっぱり中だけで完結するのは難しいかなと思っています。

—それでは、そういった状況を考えたときに、今後必要とされる地域の人材、あるいは高校生たちがいったん外へ出て行く可能性があり

ますけど。戻ってきたときに、「どういう力を持っていてほしい」とか、「どっついう思いを持っていてほしい」というのがありますでしょうか。

幅口主幹…必要となる地域の人材というのは、「いろんな人を結びつけられる人」が必要になってくるのではないかと思っております。

例えば、(外の人を)連れて来るだけじゃなくて、一緒に悩んでくれるような人材が求められる人材像になるのかなと思っっているんです。

あと、高校生について、島に定着してはほしいんですけど、なかなか、彼らも彼らの人生があるなかで、「戻って来い」とも言いづらく。「いざ、戻って来て、何をやってくれるの？」っていったところの、そのあんまりビジョンは描けてないかな。ただ、ここで暮らしてもらった三年間なり、ずっとここで育ってきた高校生が、何かについて、奥尻のことを思い出してもらえような、そのようなものがまず第一歩かな。高校生に関しては、第一歩かなと思うんですけども。

今なら、ネットが発達しているので、ここに住んでいなくても、いろいろ島のことに対して提案してくれたりとか、いろいろな力を貸してくれたりするっていう仕組みはできていると思いますので。

なおさらそこで、奥尻島に戻って来てくれれば、なおさらいいかなっていうイメージは持っていますけども。

—いわゆる、定住人口、交流人口の真ん中にある、関係人口という考え方ですね。

幅口主幹…はい。多分これからも、関係人口になっていくんだと思うんですけどね。

さつき羽立が言ったりリーダーに関して、関係人口の枠組みになっていくと思います。「定住してくれ」っていうのは、ちょっときびしいかなっていう。かといって、観光だけで終わらせるのもさびしいですね。

——そうですね。

幅口主幹…ええ。そうすると、関係人口が出てくるのかなと思います。

——大学生の場合ですが、中山間地域との交流で「第二のふるさと」という言い方をよくしますけども。そういう場所ができたということ、彼らにとっても、とてもうれしいことのようにです。

幅口主幹…ええ。ただ、そこがまだ歴史がなかったり、経験則が成り立っていないなかで、その人とどうやって地域が結びついていくのか。せつかく、第二のふるさとまで思ってくれた人を、地域の人はどうやって大切にしていくのかっていうのもありますし。そして、こっち側のものに対して、若者はどうやって返してくれるのかっていうのも、これからいろんな経験が蓄積していくと、スタイルは確立していくんですけど。一つは、それがいいなかで、アプローチする姿がちょっと難しいかなとは思ってはいるんですけど。

3 町立移管後の高校生への思い

——他の町でもこの町でも「若い人が働ける場所をつくってあげたい。

活躍できる場所をつくってあげたい」という主旨のことを、何回も聞いてるんですけども。そういう思いっていうのは、昔からあったんでしょうか？ それとも、高校を町立移管した辺りから、また一段と変わったものになったんでしょうか。

幅口主幹…昔からは、あったと思います。やっぱり、若い人が来てもらうためには、ここ以外の人に来てもらうためには、雇用する場っていうのは絶対必要になりますので。

ずっとそうだった思いは昔からあって。その深さとか思いにいたるところの広さとかっていうのは、変わってきてるかと思えますけど。根本は、昔からあったものだと思います。

ただ、そのなかで人口が減少していたり、自分の収入とかが減っていったりとかしたりすると、その世代が自信がなくなっちゃったのかなっていうのは、つくづく感じるんですよね。

そこが、後継者問題になってくるんだらうなと思います。「うちの家業を継いでも、苦勞ばかりでいいことをさせることができないかな」という思いが、今の現役世代が抱えてしまった閉塞感が出てきているという気がします。

——高校生たちが、町にいろいろななかたちで出てきて、「こんなふうにしたらどうか」とか、「あんなふうにしたい」とか、いろいろな提案したりするわけなんですけれども。

そういうのは、町の人からすると、どんなふうを受け止めることになるんでしょうか？

幅口主幹…個人的な意見になつてしまふんですけど。僕は、すごいありがたいなつて思います。というか、僕が高校生のように、あんなに町のことを考えて何かをつくりかつていうことができなかった。それが今の高校生ができるっていうのは、すごい頼もしいと思つております。そして、高校生の世代にしか見えない世界があると思います。色使いがあると思います。そういった意味からも、発信してもらおうとありがたいです。

あと、三年後、四年後には、彼らが主役になつていく、現役世代になつていくなかで、そこに出てからじゃなく、出ていく前の今のところで、そういう発想を持つていたりっていうのが、すごい心強いなと思つています。

——昨日、高校に行つて、ワークショップをしているところを見ました。生徒が自分から積極的に発言していました。自分たちの高校時代、あるいはちょっと前までの高校というのは、やらされ仕事だと感じると適当に流していました。発表の時間が来ると、誰かが教科書に則した発表をする。奥尻高校はそれとはずいぶん違うなと感じました。そういった高校生たちの姿勢は、町の人にはどういうふうに映つていますでしょうか。

羽立主幹…いいことだと、自分は思ふんですけど。あのグループワークなんかも、自分は、以前は教育委員会にいて、社会教育を担当していたんですよ。だから、そのころもグループワークとか、よくやつてたんですけど。

例えば仕事してても、自分の意見をぶつける力つていうのは、これ



から必要になってくるだろうし。例えば、今まで意見できなかった人とかも、そういうようなもので変わっていくことを考えると、成長なのかなっていうふうに。

あとは、例えば、この前の祭でも、高校生が「こういうふうになりたい」というような相談があつて、自分たちとしては「どうやったらできるのか」というアドバイスだったりとかしていました。やっぱり、「自分たちでやりたいって思うことを、やらせてあげたい」という気持ちはあるんですよ。

例えば、それが失敗であつても、「じゃ、次どうやったらうまくいくのか」ということを考える機会になるだろうし。そういう経験っていうのは積ませてあげたいなっていうのは、ほんとに思いますね。

社会教育にいたっていうのもあると思うんですけども、そういうような、例えば活躍する場を提供するとか、そういうふうなことは、やりたいことをなるべくやらせてあげたいっていう気持ちで思っています。

——「社会教育にいらつしやった」ということなので。町立になる前は、社会教育は高校生とはなかなか関わりを持ちにくい部分もあつたと思うんですがいかがだったでしょうか。

羽立主幹…そうですね。どちかっていうと、小学生、中学生との関わりは多かつたんですけども。それでも、全くないわけではなかつたんですよ。

——高校生が町のなかで、自分の役割を持つというのは、神社のお祭



とか、そういう伝統行事ではあったと思うんですけども。それ以外では？

羽立主幹…昔ですよね？

—ええ。

羽立主幹…自分が社会教育にいたときは、高校生が例えば、野球部の高校生が小中学生の試合の審判だとかで協力してもらったりとか。中学校のころに、その先輩方がそういうふうにしてもらったっていう繰り返しで、「自分のときもやってもらったから、後輩にも協力する」とか、そういうのはよくありました。

—そうすると、この島では、高校生の居場所というか、貢献する場所というのは、町立に移管する前もある程度用意されていたということでしょうか。

羽立主幹…小さいですけども。あとは、例えば敬老会とか、そういう高齢者のイベントとかあったら、そういう手伝いとかにもよく高校生、中学生が来てくれてたんですよ。

—そうなんですか。そうしますと、町おこしワークショップとか、あるいは、O・Dでしたっけ？ オクシリイノベーション事業部みたいなことは、町にとっては「いきなり高校生が来たぞ」ということではなくて、ある程度慣れていたというか……？

羽立主幹…今は、自分たちで発案してやるんですよ。

当時は自分たちの発案っていうよりも、地域、例えば自分が社会教育にいたときは、高齢者が「若い人と交流したい」とか、「子どもも孫もみんな遠くにいるんだけど、そういう孫の世代の高校生とかとちょっと話したい」とか、そういう要望があったりとかして、そこを結びつける役割というのを社会教育でやってたんですよ。

ただ、そこで経験してもらって、例えば「次のイベントも参加したいんですけど」とかっていうような声をもらって、ちょっとずつ活動を広げていったっていうようなかたちでした。

今は高校生は自分たちでやることを、自分たちで考えてやっている感じなんですよ。だから、今と以前とはちょっとタイプが違うような気がします。

4 高校生には完璧な提案を求めなくてもいい

—なるほど。「タイプが違う」というか、変わってきた」という話でしょうかがしたいんですけども。

「町おこしワークショップも最初のころは、何も知らないで話を聞くだけだった」というふうにも聞いています。それがだんだん、疑問を持ちたり提案をしたりするようになってきています。多分、まだ町の大人から見たら、「それは現実離れしてるね」というふうなことになると思ってますけども。その辺、現実離れしないで、町の実情とか、町の生態系とかを理解したうえで、自分たちのできることを、あるいは、町とすることができることを提案していくのが最終形の一つかなと思います。



「そういう最終形でいいのか」ということと、「その最終形になるために、町として、あるいは、地域政策課として、何かサポートしていくとしたら、どんなことがありますでしょうか」という、二つの質問をさせていただきます。

幅口主幹…多分、別に突拍子がなくてもいいんだと思うんですよ。

——突拍子がなくてもいいのですか。

幅口主幹…うん、別に実態にそくしてなくても、自分たちが思ったことに対して率直に問題を提起するというのが必要だと思います。

ただ、その幼さは、これから経験していくしかないかなとは思っていますけど。だから、問題の発言と発表の仕方はいいと思いますし。別にそれで、町のために提案するっていうのを、僕、教育に携わったことがないので、高校生に求めているのかわかって。僕も実は、同じようなイメージを持つてるんですね。

多分、発案もあっていろいろかたちにはなってきたけど。なんかちょっと理論が幼なかつたりとか、ちょっとデータに基づいてないものを結論に持ってきてきちゃったりっていう幼さはあるんだけど。だけど、そこを高校生に求めちゃっていいのか。僕、これが多分、大学生だったら、そこら辺のものはきちっとしたものができてくるんだけど。

彼らの、今のところの教育的な位置づけにおいて、そこまできちっとしたものや彼らに作らせなきゃならないのかっていうのが、まず一つのその最終形に対しての答えなんですけど。

——「高校時代に完璧なものをやらなければいけないということではない」ということでしょうか？

幅口主幹…うん。そこは、これからやっていって。ここを基本にして、「おもしろいね」って興味を持っていって。それから知識を蓄積していけば、最終形になるものはできるんだけど。そこを彼らの年代の三年間で、そこまでのものを求めなきゃならないのか。それであるならば、幼いけれども、僕たちじゃ全然気づけなかった視点から、突拍子もない意見をもらってた方がいいのかなって。

いや、僕も最初、こっち側に来たときに、提案してもらったものを見たんですけど。やっぱり、僕たちみたいな外で経験したのからすれば、幼いんですよ、議論が。だから、「そのまま町の施策に展開しろ」っていうかたちは難しいと思います。

ただ、そこで今にいたったのは、「彼らはまだ、大学生じゃないからな」って。本来であれば、データと理論に基づいたもので提案してくれたら、すごくうれしいけれど。それを、高校生に求めていいのだからかっていうのは、今ちょっと感じてきているところですね。「あれだけの部活を使ったんだから、ちゃんとしたものをつくれ」っていうのは、当初は思っていたんですけど。なんか、そんな気はしますね。

それよりも、自分たちの足とか目で稼いだ情報で、それを疑問に思ったことを素直に発表できるっていうことの方がいいかなっていうようなことが、今の自分の考えとしてあります。

——羽立さんの方で何か？

羽立主幹…自分もちょっと近い部分あるんですけど。やっぱり、いろいろ考えてくれているのはわかるんですけど、じゃあ、現実問題とすぐに結びつくかっていったら、結構現実離れしているなっていう部分はあります。ただ、いろんなものを考えて、そういうふうな解決に結びつけられる考え方とか、そういうのは、今やっていることっていうのは、将来むだにはならないと思うんですね。

だから、「ほんとに現実課題と向き合ったときに、どう解決していくのか」っていうのは、問題解決力っていうのは、多分今から積み重ねてやっていくことで、将来例えば、自分は就職したときとかに役に立ってる知識だと思います。

今やっていることが、じゃあ直接地域にすぐ反映できるかとか、そういう部分は自分たちもあんまり考えてはないですよ。ただ、この奥尻の高校生として、やっぱりそういう問題解決力と例えば、自分はその環境に合わせられる適応力っていうのか、っていうのは、その問題解決力と適応力をここの高校で高めてもらいたいっていうのは思うんですよ。

やっぱり会社に入ったら、もつと理不尽なこともあるだろうし。そこで、どれだけ「すぐ辞める」とかじゃなくて、適応していけるかとか。将来苦労しないために、そういう能力を高めてもらいたいっていうのはあります。

幅口主幹…そうですね。ほんとに、自信持たせるために、もう提案あったことをかたちにしてあげたいとは、気持ちがあります。かたちにしてあげると多分、自信持って、もつとこのめり込んでくれるとは思っています。

幅口主幹…がんばってる人を応援するのは人間の本质として、当たり前のことですから。そして、そこにいたるまでの人間の成長に時間がかかることは、みんな身をもって知っているわけですから。そういう感じで思っています。

——今、高校と地域政策課とは、どんな関係をお持ちでしょうか？
フォーマルなもの、インフォーマルなものを含めて。

幅口主幹…基本的に、僕の前の担当がやってたんですけど。

奥尻高校さんの方で、離島ならではの問題で、「遠征費にお金がかかる」っていうことでクラウドファンディングをやったんですね。そこら辺のところから、高校と付き合い合っていくことになっているとは思わんんですけど。

当然、「遠征費なんていうのは、昔からかかってくる問題、どうしようか」っていったところに高校生が自ら、稼ぎにいくって、外の収入を取りに行くっていうことに対しての、発想もすばらしかったでしょうし、「私たちがやるよ」っていうところの自負心もすごいと思いましたので。そこら辺から多分、付き合いはしているのかなって。

その付き合いがあって、今クラウドファンディングやったんですけど。その流れってというのは、またTシャツを売ったりタオルを売ったりっていうかたちで。その販売形態が変わってきているなかでの、「やる」っていったときに相談されれば、「こういうのもいいんじゃない」っていうアドバイスをしたりとかっていうかたちのつながりは、今ところ出てきていると思います。

それが縁で、何かあったときに話をして。月に何回かとか定例とかっていう話ではないですけど、何かあったときに、また顔合わせたときに、いろいろ話をしたりっていうのは。特に、行政に持っていくときの報告の仕方とかってというのは、多いかなあと。

その成功体験じゃないんですけど、何かやったときの報告って、できれば、町長なり副町長なりのとこで発表させてあげたいなっていう思いがあって、その場面を設定します。そのときに、「こういうような説明の仕方の方が、わかりやすいよ」っていうようなのを、つながりとしてやってる感じですかね。

——昨日、高校生へのインタビューの中で、「書類が作れるようになった」と言っていました。

幅口主幹…そうなんですか？

——「申請書も報告書もずいぶん書けるようになった」と実感しているようでした。

幅口主幹…そうですか。

——多分、そういうところで、達成感を感じられると、実際の企画が失敗しても、ポジティブにとらえられると思います。そういう意味では、生徒はすごく成長してるのかなと思います。

幅口主幹…そうなんですよ。その失敗から何を学びとるかっていう



のが、成長の過程で必要なときで。」というような計画と、どういような思いがあつてこれを作ったんだ」っていうものと、それでうまくいかなかったときに考察する時間つて絶対必要だと思つたので。

——そうですね。

幅口主幹…うん。で、そこに必要性を感じてくれたら、こちら側もううれしいなと思いますけど。

羽立主幹…「高校生と、じゃあどんなつながりがあるか」っていうと、例えば、職場体験の受け入れだったりとか。あとは、祭を自分たちで運営するんですけども、そういうところでの高校生との関わりとか。あと、イベントだと、マラソン大会、奥尻で一番おつきいムーンライトマラソンとかあるんですけど。そういうような部分での関わりぐらいで。個人的には結構、関わりつていのはあるんですけど。行政、この仕事としての高校生との関わりつていのは、そんな多くはないですね。個人的には、「島おや」っていうのがあつてですね。

——なぜつてるんですか？

羽立主幹…ええ、島おややっていて。家に、高校生遊びに来たりとか。今年から、島おやつていふのをやってるんですけど。担当しない子も家に遊びに来たりとか。そういうので、いろんな話は聞かせてもらう機会は、多いんですよ。

学校の文句もあれば、いろんな相談とか、「こういうの地域でちよっ



とやってみたいんだけど、誰に相談したらいいの？」とかっていうのは、個人的には聞いたり答えたりはするんですけど。仕事としては、祭
職場体験ぐらいなのかなと思いますね。

5 やっていい良かった点

——次に、「ご苦労されている点」、あるいは「やってよかった」とい
うポジティブな点とか、「こういうところが助けられてるな」とか、そっ
ちも含めてポジティブ、ネガティブで、今後の課題を？

幅口主幹…やっぱり、その世代と触れ合えるだけで、エネルギーと
かを、なんか気持ちの前向きになったりとかする部分と。なんか、彼
らの持つ健康さとかが、そこをそうさせるのかもしれないんでき
ど。

まずは、メリットでしたっけ？

——ええ、ポジティブなところとネガティブなところで。

幅口主幹…やっぱり、自分がない気づきをくれたりとか、「ああ、この
世代はこういうふう考えるんだ」とかっていう、自分がないものを
教えてもらってるかなっていうのが、すごいポジティブなところだ
よね。

ネガティブっていうと、これはどうしようもないことなんですけど。
今まで、学校と交流したことがないので、どう触っていくか。多分お
互いの思惑があると思うんですけど。教育は教育サイドの考えとか

決まりとか、いろいろな難しいことがあって。

あと、知事部局的には知事部局なりの、今までの仕事のやってたスタンスがあるので。ここをうまくかみ合わせれば、ちょっとお互いのことをまだ知らなすぎて。どこが教育側で苦労されていて、どういうようなかたちで持っていけばいいのかっていうのが、一番難しいかな。

例えば、「物を売りたい」っていうところであるのであれば、知事部局からいえば、いろいろな今までやってた物販の経験とかもあるんで、そのツテを使ったり、ノウハウとかを教えたりとかするんですけど。そこをなんか誘導っぽくしちゃうのも嫌だし。

「それでやる」ってなったとしても、今度教育現場的にもいろいろな保護者との関係とか、先生間との関係とかいろいろあると思うので。一概にパッと入っていきづらくなっていうのは、すごく感じています。それ以外のデメリットって、あんまりないと思います。

——「物販のツテやノウハウをお持ちだ」ということで。ところが、教育には教育の生態系みたいなものがある。それを、ビジネスの論理に合わせて、生態系自体をビジネスの論理に合わせてしまうというような、そういう発想でやっているとこもあると思うんですけども。

幅口主幹…それが、「学校サイドとしてオッケーだよ」って出してくればやれるんですけど。そのオッケーなのかどうなのかという、町としての関わり方ですね。

——例えば、私の知ってる範囲だと、ビジネス用語をかなり使って指導する学校もあります。で、これってこれまでの学校教育になかった

言葉だよなというふうに思いますけども。

そういうのはどう思われますか？

幅口主幹…僕はそれ、学校が望むのであれば、協力の仕方がいろいろあるんで。僕は全然、問題はないと思うし。学校が望んで、そこに生徒さんが望むのであれば、そっち側の方で協力していくべきだと思うんですけど。その学校の、「こういうことをやりたいんだ」っていうのを、待たなきゃならないのかな。そこがちょっとはがゆいよねって。

多分、いろいろな教育サイドのルールとかがいろいろあって。そこが、それがわかれば僕たちも入って、「ここ、こうクリアできれば、こういうことできるよね」とかって、こっちからの逆提案がしやすくなるんですけど。

で、「ここをもっとこういうふうやって、こういうふうに見えるんなら、ここをもっと改良できるよ」とかっていうのは、アドバイスはできるとは思うんですけど。

そのアドバイスを、ダイレクトでやっていいものなのか。「なんか、有力者から言われたから、やらなくちゃならない」というような、義務感を生ませるのも嫌だし。

——そうですね。

幅口主幹…うん、そこがちょっと、どうやって付き合っていくのがいいのかっていうのは、これからの模索なんだろうなと感じています。

——高校と、これからそういうところで「コミュニケーションを取られ

ていくとどうですか？

幅口主幹…はい。というか、そうしていかないと解決はしていかないだろうし。

うちもやっぱり、若い力とか若い視点。そして、「あわよくば、そのまま残ってほしい」という打算的な考え方もありますし。

多分、教育は教育サイドで、「こういうことを町にやってほしい」という部分があると思うので。その調整をどうしていくかかっていうのが、これからの課題かなと思います。

—そのところが、おもしろいところでもあると思います。

幅口主幹…まあ、未知のことですからね。教育と知事部局との垣根がなくなっていけば、やりやすいんでしょうけど。今まで、結構接点のないところだったので。

—そうですね。

幅口主幹…うん。おもしろいなとは思いますが。そこまで、教育の素人が入っていったいいのかなとか。

—個人的にはいいと思ってます。学校は「今、あの子がこつだから、こういうふうにしてるんだ」みたいなことがあります。町の人が生徒ひとりひとりの学びの過程まで入っていけるようになって、教育がおもしろいことになると思います。

羽立主幹…自分は、正直楽しい。高校生と接する機会っていうのは、すごく楽しんでます。新鮮だし、実際にやって楽しんでますね。

特に苦労っていう、子どもたちに対しては、そんな苦労とかはないんですけど。ただ、一つ気になるとすれば、学校が目指してるようなものと、自分たちがやってるものの方向性が合ってるのかどうかっていうのが不安になるくらいで。子どもと接しているぶんには、全然普通。こっちとしても楽しんでますし、高校生にも楽しんでもらえたらそれでいいかなっていう。気を使っているのは、あとは、話しやすい環境っていうのをつくってあげるといことくらいかなと思う。

あんまり、島おやもそうなんですけど。「これをやらなきゃならない」とかっていう考え方があんまりないんですね。だから、普通に会話しながら、「ああ、こういうことやりたいんだったら、じゃ一緒にこういうふうにやろう」とか。自分も、ほんと楽しみながらここに。

職場体験なんかも、こっちが楽しみながらやってたと思うんですね。嫌々やってるっていうことは、全くないです。

—今日はお忙しい中、ありがとうございました。